# 帝国を狩る！ー心やさしき復讐者ー

izanami

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

# あらすじ

腐った世界
腐った人間
腐った価値観
腐った正義
意味合いは少しずつ違うが全て悪だろう。
そんな腐った帝国に俺は全てを奪われた。
だからこの国の全てを壊す。

邪魔するやつも消す。
他人のためでなく自分のために……
俺が目指すのは帝国に対する革命なんかじゃねぇ。
未来なんてどうでもいい。
ただ俺は過去の、復讐のためだけに牙を剥く。

復讐のみを目的とする一人の男の物語
帝国とは真っ向から敵対し、革命軍とはウマが合わない、組織に属さないそんな男の物語

不定期になります。
しかし、２５００ぐらいずつですので頑張れば1時間ちょっとで書けるので最低でも1週間以内には投稿したいと思います。
※７月１７日　感想にあった意見を参考にあらすじ修正

# 目次


過去を狩る！ 1
帝具使いを狩る！ 9
涙を狩る！ 18
恩人を狩る！ 28
情報を狩る！ 37
休息を狩る 47
隊長を狩る！ 55
協調を狩る！ 68
狂賊を狩る！ 79
因果を狩る！ 86
狂気を狩る！ 97

# 過去を狩る！

人が腐敗し、国が滅びる。
国が滅んで、新たな秩序を作る。
新たな秩序は、平和をもたらし。
その平和は、人々を腐敗させる。

人類が誕生してから約５０００年、何度も繰り返されてきた真実。
この国はよく持った方だ。
人が繰り返してきた輪廻を停滞させて１０００年もの長い期間、見かけ上の平和を持たせたのだから。

だから……だからこそ、もうそろそろ滅んでもいい時期だ。

2年前

「見てくれよ、特級危険種のディグレートビーストだぜ!」

「おい、ちょっと待て!トドメを刺したのは僕なのになんでお前が我が物顔で見せびらかしてる」

「良いじゃんか～そんなこと気にすんなよ。俺が麻痺毒撃ち込んだから仕留められたんだろ」

特級危険種ディグレートビースト

二足歩行で牛の様な顔。

そして何よりも石にしろ、木にしろ、長い棒状の武器の様なものを作り常に持ち歩くという珍しい習性を持つ。

体長は2メートル以上あり、その狂暴性から多くの人間を困らせている悪魔だ。

そんな巨体をぞろぞろと引きずり、口げんかしながら町のメインストリートを闊歩しているのは、まだ16歳になったばかりの二人だった。

一人称が僕の、ケイと一人称が俺の、ダイア。

この二人は双子であり、今では村で5指には入る狩人だ。
「おっと、また今回はドえれ―獲物を採って来たじゃねーか」
「お、おっちゃん。何言ってんだよ。おっちゃんなんて毎日のように特級危険種を狩ってくるじゃねーか」
「そうです、あなたに言われても皮肉にしか聞こえませんね」
「いや、お前ら自分の年齢わかってんのか？」
おっちゃんことエンジ。
この道15年の猛者であり、村で1、2を争う使い手の彼から見てもやはりこの二人の（年齢と比較しての）強さには舌を巻くものがあるらしい。
「そういえばお前ら、ロロナとの約束はどうしたんだ？」
「今回に限っては仕方ないでしょ、俺たちが仕掛けたんじゃなくて向こうから仕掛けてきたんだし、なぁケイ？」
「そうだな。……まぁあの姉さんが僕たちの話を聞いてくれるかは別としてな」
「おいおい、ありそうなことを言うんじゃねーよ、だいた「ダイア？ケイ？その背中にしょってるものって何かな？」」
ダイアは急に自分の話を中断させた声のほうに恐る恐る顔を向ける。
ケイの顔はもうすでにそちら側に向いていた。

ちなみにエンジはすでに後方に退避済み。

「……」

「あれあれ？どうして黙っちゃうの？おねーちゃんが質問してるんだよ？」

語尾にクエッションマークなのはこの女の人のデフォルト……ではなく怒ったときにだけ現れる癖の様なものだった。

それを知ってるからこそ、彼女が激昂しているのだということが分かりこの双子は怖くて二の句を発することができないのだが。

「いや、これは俺たちか「言い訳なんか聞きたくないよ？」

ええー、質問に答えることも結局だめなのかよ……八方ふさがりじゃねーか。

勇気を出して弁解しようとしたが先ほどケイの言った通りに、このロロナと呼ばれた女性は聞く耳を持っていないらしい。

「はいじゃあ、ここでロロナさんのクイズ大会です！第一問、≪三人の誓い≫第１２５条はなんでしょう？」

三人の誓いとはダイアとケイ、そしてロロナの間で交わされた約束事のことだ。

もともとは５０しかなかったのだが色々と追加して言った結果今では２００近くあるらしい。

ちなみに３人とも全てを暗記している。

……変な所でもハイスペックなのだ。

「はい、姉さんのいないところでは第一級危険種までしか狩りをしてはいけない、です」

ケイが恐る恐る答えた。

「正解。じゃあ第二問、その背中に抱えている物は？」

「ディグレートビースト」

今度はダイア

「はい、じゃあ最終問題です。その危険指定レベルは？」

「「特級……」」

もう、怖くてロロナの顔を見ることすらできないからなのか、二人の視点は地面に固定されて微動だにすらしなかった。

「だいせーかい！ご褒美として罰を与えましょう。３０分後に家に集合です、ちなみに来なかったら罰ゲームとして罰を与えます」

ロロナの満面の笑み。

笑顔と言う物はこんなにも怖いものなのか、周りで見ている人たちは自らの固定概念を覆されたような気持ちになっていることだろう。

そしてただ茫然とたたずんでいるこの兄弟には、前にも後ろにも罰しかないことに対

して嘆くことしかできなかった。

「……と、言うことだから！」

家に着いてから、かれこれ1時間正座のままロロエのありがたーいお話を聞き続けた2人の体力（と足の筋肉）ははっきり言ってもう限界だった。

よく考えてみればその前に特級危険種を倒しているのだから考えてみれば当たり前、むしろ意識があるだけましな方かもしれない。

「もう約束を破ったりしません」

2人が深々とそのまま頭を下げ、土下座の体勢になってやっと罰は終わったようだ。

「お姉ちゃんにはもう2人しかいないんだからね……」

小さくつぶやいたこの言葉を2人は聞き逃すようなまねはしなかった。

そして何か言葉をかけることもしなかった。

ロロナ

彼女はかつての帝国将軍の娘だ。

病気で休養にきたその将軍が村の女と結婚して生まれたのが彼女で、それ故に彼女もかなりの使い手である。
エンジが村で1，2を争うと言ったのだが、その相手こそロロナなのであった。
父はついぞ病気が完治せずに彼女が１０歳の時に他界、母もそれを追うように危険種に襲われて死んでしまった。
現在では彼女の母と同時に同じ危険種に襲われた夫婦の息子たちであった、ダイアとケイの3人で暮らしている。
「まぁ生きててよかった！じゃあ今日は二人が取って来た危険種でおいしいものでも作るよー！」
少し重苦しい雰囲気を感じ取ったロロナが無理やり明るい声で霧散させようとする。
「……大丈夫だよ。姉さんより早く死ぬなんてことはぜってーないから！」
「僕はダイアのその言葉がフラグにならないことを切に願うよ……」
ロロエは苦笑い、しかしそれは何故だかとてもうれしそうな苦笑いだった。

「あ、あと姉さんが料理するって不吉な単語が聞こえてきたんだけど」
「な、何言ってんだよ、ケイ。そんなわけないだろ！もう罰は終わったはずだろ」
「そんなに言うことないんじゃない!?お姉ちゃんだって傷つくときは傷つくんだよ!?」

# 帝具使いを狩る！

「はぁ……本当にこんな辺境に帝具なんてあるんですか？」
「何を言っている、現在まで見つかっていないものだぞ、辺境まで来ないとあるわけないじゃないか」
「それもそうですね」
町から約1キロ離れた場所に二人組がいた。
声から判断して一人は男、そして一人は女のようだ。
そして女の傍らには犬の様な、コアラの様な二足歩行をする動物がいた。
「コロちゃんもおなかが減ったようですし、早めに任務を終わらせて帝都に帰りたいものですね」
「ああ、だが仮に抵抗されたならば……」
男のほうは目つきを鋭くさせて女のほうを見やる。
「解ってます。帝国に反抗して平和を乱そうとする悪は……」
まるで親の仇を見るように空を見上げる。

「この手で断罪します」
力強く踏み出した彼女の頭でポニーテールがぴょこん、とかわいらしく揺れた。

「おい、ケイ。お前気付いたよな」
夜、電気を消しこれから眠りにつこうという時に、ダイアは自らの片割れに声をかけた。
「当たり前だ。僕は、僕たちは誰よりも彼女を見ているんだ」
夕食の準備をした時のロロエの目、そこには間違いなく水分がたまっていた。
彼女は強い、しかし自分たちとあまり年の変わらない、しかも女性なのだと彼らは改めて思った。
この生活が始まったのは１０年前になる。
当初彼女は１０歳になったばかりだから今年やっと成人になるというものだった。
「俺は強くなるぞ、姉ちゃんが心配なんてしなくてもいいぐらいに」

「僕も同じです。これ以上あの人に悲しい思いはさせたくないですから」
もうすでに、人間が一生で味わうよりも大きな悲しみを背負って、それでも４歳下の僕たちを育ててくれたのだから。
声に出さなくても彼らは同じことを考えていた。
どんなに強くなったところで家族のことを心配しない人間はいない、たとえいたとしても彼女はそんな人間ではないことなど解りきっていることだというのに……。

≪第一級危険種グランドオーク≫
それが彼らの今日の収穫だった。
いや、いつものと言った方がいいかもしれない。
この町の周りには第一級危険種が多く存在し、その多くが食用だということで主に狩りをして生活を営んでいる。
だからなのか、日中は町の人たちが居なくなり閑散とすることが少なくない。
そんな中、早めに帰って来たダイアとケイは町の人ではなさそうな２人組を見つけて

声をかけた。
「どうかしたんですか？」
「あ！人がいましたよ。隊長」
声をかけると、嬉しそうに上司（？）に報告をした。
「すまないが、町の人たちがどこに行ってるのか教えてくれ。流石にこんな寂れているわけじゃねーだろ」
すまないが、と言っている割には上から目線だな。
ダイアはそう思った。
思っただけで口にするようなことはしなかったが……。
「皆狩りに行ってるんですよ、たぶん夕方ぐらいにならないと帰ってきませんよ？」
「ということは夕方まで待ちぼうけと言うことか……」
「ありがとうございます。こちらの町に来てから誰にも会わずに、ほんと困ってたとこなんですよ」
女性のほうは男と対照的に礼儀正しい人だった。
うん、やっぱり女性はこうでなくっちゃ。
「そうだ、帝具って知ってますか？」
帝具……この帝国の始皇帝が未来にまで残せるようにと、貴重な超級危険種の素材、

レアメタル、失われてしまった超技術（オーバーテクノロジー）を使い作ったといわれる４８の武具。
その武具は１０００年経った今でも争いで大きな威力を発揮する。
そしてその一つの持ち主を彼らは知っていた。
「ああ、それなら俺たちの姉さんが持ってるぜ」
疾風迅雷≪エアリアル≫
腕輪（ガントレッド）の帝具で自分と触れているものの周りに風を纏わせる帝具
もともと将軍であった彼女の父のものであり、唯一の形見でもある。
よくスカートのまま戦っている彼女の大事な部分が見えないのもこの帝具の恩恵ということは余談である。
「今回はその帝具に関しての調査をお願いされて帝都から来たんですけど、よかったら案内してもらってもいいですか？」
「解りました。では僕たちの家に行きましょう。そこで待っていれば姉さんもすぐに着ます」
「はい！ご協力感謝します。では隊長、行きましょう」
「ああ、俺はいい、もう少し村の様子を見て回る」
そういうと彼はそそくさと歩いて行ってしまった。
「すいません、あれでも隊長は人見知りで、ではよろしくお願いします」

こうして彼らは彼女を自宅へ招きいれた。
招き入れてしまった。

ロロエが帰ってきてすぐにその話は始まった。
自分の受けた任務の内容と言う物をこと細かに説明してくれたのだ。
「……というわけで、帝具を回収させてもらえませんか？」
「すいません、これは私が持っている唯一の父の形見なんです。譲ることはできません」
「……それがたとえ皇帝の勅命だとしてもですか？」
彼女（セリューと言うらしい）の目つきが鋭いものへと変わる。
「はい、ごめんなさい」
「解りました」
その一言にロロエは胸をなでおろした。

やっと長い話が終わったのかと思い、これから帝都とはどんなところか聞こうと双子が口を開こうとしたその時だった。

「コロ、捕食」

体長４０センチぐらいしかなかったコロと呼ばれた生物の身体が５倍くらいになり、ロロエに襲いかかった。

その口にあったのはの無数の歯……と言うよりも刃

「!?、エアリアル！」

腕をかみついてきたコロに対して瞬時に帝具を起動、身体を風が覆いコロを吹き飛ばした。

「お、おい！何するんだよ、急にどうしたんだ」

「姉さんが何をしたっていうんですか！」

現状が把握できないままそれでも喚き散らすダイアとケイ。

「悪は断罪する。皇帝様の命令に背くことは帝国に背くこと。そんな秩序を乱す悪はこのセリュー・ユビキタスが絶対正義の名のもとに断罪する！」

おかしい、言ってることが全く理解できない。

彼らの思いは同じだった。

コロ、帝具≪ヘカトンケイル≫にかみつかれ一瞬対応が遅れてしまったロロエの右腕

には血が滴っていた。
「最近の盗賊でもこんな話が通じないということはないんですけど……」
ロロエは少し呆れたように溜息をつく。
その間に風は患部の血を吹き飛ばし、すでに回復の兆しを見せていた。
「当たり前だ。私は正義！盗賊なんかと一緒するなぁぁぁぁぁぁぁ！」
両手に持った旋棍銃化（トンファーガン）をロロエに向ける。
「エアリアル！」
だがそれも彼女が強く帝具の名前を呼んだだけで軌道が逸れてロロエに当たることはない。
疾風迅雷≪エアリアル≫
風を纏う
説明するとそれだけの能力なのだが、皮膚から数センチの間に台風なんて比にもならない風と、その風圧が凝縮される。
銃弾なんて通るわけなく、物質が直接触ろうものなら容易に吹き飛ばす。
全ての帝具の中でも１０指には入るであろう強大な帝具だ。
一方で実態を持たないエネルギー弾や電撃には無力という弱点もあるのだが……。
ロロエの後ろで震えてうずくまっている二人。

この二人だけは絶対守る。
そう心に決めて彼女はそこら辺にあった箸などの小さなものを手に持った。
「ちょっと痛い目を見てもらいますよ？大丈夫です、死んでしまったら私が風に還してあげますね？」
癖の疑問視が出てきて見ていた彼らの緊張が高まった。

この時ダイア、ケイ、そしてロロエは知らなかった。
帝具同士がぶつかったときのあるジンクスを……。
絶対にどちらかは死んでしまうのだということを……。

# 涙を狩る！

「急所は外してあげるね？その代わりすごく痛いよ？」
そう言ってロロナは持っていた箸などをおもむろに投げ出した。
手首だけを使い軽く投げられたそれらは、そのフォームからは信じられない速度でセリューを襲う。
エアリアルは自分とそして触れたものに風を纏わせる帝具。
触れつづけていれば常に、たとえ離したとしても数十秒間その風は維持される。
「っく!?コロ！」
生物型帝具≪ヘカトンケイル≫はセリューの前に出て盾になる。
しかし、弾丸は無数にあり、そして何よりも文字通り風の速度で襲いかかる。
全て処理できるはずはないのだ。
二発ほど右足に被弾する。
「これで身動きができませんよね？どうします？そのワンちゃんは私と相性悪いようですし？」

「どうするか？……そんなこと決まっている、私は悪を滅ぼす！正義は絶対屈しない」
彼女の正義はどこにあるのだろうか？
ロロエの優位によって少し冷静になって来たダイアとケイはそう思わずにはいられなかった。
「あーあ、おねーちゃんは別に悪じゃないのになー。でも火の粉を振り払うのに文句を言う人はいないよね？」
ロロエが一歩踏み出す。
それだけでそこにあるもの全てが風圧によってがたがたと震える。
「吹っ飛びなさい！」
ただ歩き、拳を振るう。
それだけの行動なのに起った現象は桁違い。
セリューを吹き飛ばし、コロを吹き飛ばし、屋根に穴をあけ、そして家の中はぐちゃぐちゃ。
まさに嵐が過ぎ去ったあとだった。

「おい、このガキどもと引き換えだ。さっさと帝具をよこせ」
その声と同時にダイアは背中に大きな衝撃を感じ、前に吹き飛ばされた。
「誰だ!?」
思わず叫んだ。
そこで彼が目にしたのは、セリューと一緒にいた男がケイに拳銃を押しつけているところだった。
「つたく、あの馬鹿が先走りするから、あいつは強いが情緒不安定なところがあるからな……」
「……」
ケイは黙って歯を食いしばっている。
きっとそうしていないと悲鳴をあげてしまうからなのだろう。
16歳の少年には銃を突きつけられて冷静に行動することなど、当たり前のことだが不可能だ。
「おい!ケイを離せ、人質なんて卑怯だろ!」

「そんなことなぞ知らん！こっちはこんな辺境にまでやってきてんだ。……おっと、変なこと考えるなよ。この距離じゃあ銃弾のが早いのは解りきっているだろ」
「……解った。その代わり私が腕からこれを外した時点でケイを開放しなさい」
「ああ、俺としちゃ、帝具さえ手に入れば文句はねぇ」
……俺はどうすればいい、姉ちゃんが親の形見を手放そうとしてんだぞ！それも俺たちのせいで。昨日誓ったばかりじゃないか、強くなるって！
そんな思いとは裏腹に、彼の身体は動こうとしない。
とても大事にしていた腕輪。
昔、何度も何度も付けさせてくれとお願いしたが一度も付けさせてもらえなかった。
それを彼女の腕から外れるのを見ると自然と歯ぎしりが生まれた。
「外したわ。さっさとケイを開放して」
「ああ、約束は守ろ「コロ！」」
「え……!?」
バスン、そんな鈍い音とともに、ロロエの右肩から手首までが消えた。
カランカラン、音を立てて帝具が転がる。
一面に舞う血しぶき、しかしその帝具だけはその特性からか風を纏っており、いつまでもきれいなままだった。

「あ！隊長、こいつら皇帝様の命令を無視した悪ですよ」
血に濡れてゆがんだ笑顔のままセリューは男に話しかける。
一方で訳が分からない。
それはロロエも同じでおびただしい量の血しぶきを出しながらも、ポカンとしている。
「……そうか、それは粛清しないといけないな」
ドン！
今度はケイの胸が赤く染まった。
もともと約束を守る気などさらさらなかったのだろう。
……もうわけがわからない、これは夢だ、これは夢だ、コレハユメダ……
「あ……あぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
そのことによりロロエの止まっていた時間が動き出した。
しかし、血を流し過ぎてしまったのかそのまま倒れる。
……夢にしろ現実にしろ、二人を殺すなんてことは許さない！
震える体にダイヤは鞭を撃った。
「やはり悪は滅びるんです」
「ああ、そうだな。正義のもとにな」

ニター、と笑った男の顔は悪そのものだった。
ダイアは右手をのばす。
必死に恐怖と闘いながら。
もっと大きな恐怖と闘う力を得るために。
≪三人の誓い≫第３条、第１７条
二人を信じて、そして何より己を信じろ。
自分の力を知れ。
三人の誓いの中でも初期に定められた５０のうちの２つ。
今、ダイアを動かしているのはこの言葉と、何よりも怒りだ。
自分ではこの二人には勝てないことなど知っている。
しかし、この二人は絶対許せない。
だからこそ彼は手を伸ばす。
そこにある安易な力を求めて。
「疾風迅雷≪エアリアル≫!!」
己の最愛の人の一人、ロロエの宝物をしっかりと握りしめ、自分の出せる最大の声で叫ぶ。
声に呼応したように、周囲の大気がダイアの周りで荒れ狂いだした。

「馬鹿だな、帝具は適合しないと拒絶反応がおこる、勝手に自滅しな」
「ば、馬鹿は……ツグハ！……あなたです。わ、私の弟を甘く見ないでください！」
「うるさい！」
瀕死のロロエの腹に銃弾を浴びせる。
脳髄を狙わないのは、すぐに殺さないためだろう。
しかし同時に風は収束した。
エアリアルがダイヤに適応したことの証明だ。
「……ダイア！そ……の力で…逃げなさい。」
!?、何言ってんの、姉さん！」
「だ…い、さん…じゅ…なな条」
３７条
何があっても生き残りなさい、たとえもし、だれかが死んでも生き続けなさい。
ダイアはこの項目が嫌いだった。
誰かが死ぬなんてことは考えたくなかったのだ。
そして今、ダイヤは解らない。
どうすればいいのか。
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

収束したはずの風が一斉に解き放たれる。
そこにいた4人だけでなく近くの家までまとめて吹き飛ばした。
上空近くにまで吹き飛ばされたロロエとケイを回収して、風のようにダイアは山の中へと消えていった。

「姉さん！ケイ！」
必死になって呼び掛ける。
しかしケイのほうからは返事どころか反応すらしていない。
心臓を撃ち抜かれての即死だ。
ロロエのほうに限っては、はぁはぁ、と息をするだけで精一杯のようだ。
「待ってて、姉さん、血を止めるから」

風の膜を展開し、血を止める。
しかし、初めての帝具で慣れていないのかすぐに霧散してしまう。
「だ…い丈夫だ…よ、もう…わ…たしは…もたない…から」
「そんなことない！ケイだって今は寝てるだけですぐ目を覚ますよ。まったくねぼすけだよなあいつ。お、おき…ったら、ぶんなっぐってやる…んだ…大事なと…きにっ…なにしてんっだって」
……なんで俺は泣いてるんだ。誰も死んでないから泣く必要なんてないじゃないか。ああ、これはうれし涙か。そうに違いない。全員助かったから安してんだな、きっと
「だ…がら…「ダイア」」
ロロエは満足に動かないからだにもかかわらず、左手を寝たまんま、傍らに座っているダイアの背中にまわした。
「ケ…イは死ん…だよ。私も、もう死ん…じゃう…んだ」
そのままダイヤを胸に抱き寄せた
「うぞだ。姉ざんは、お姉ぢゃんは死なない！……だって死んだごとないじゃないが！」
「そうだ…ね、でもね、人は…一度しか、い…きることは…でき…ないし、死ぬこ…ともできな…いんだよ」

「いやだ、いやだ、いやぁぁぁぁ」
「ふが…いな…いお姉ちゃん…でご…めんね、二人のこと……大好きだったよ」
そのままロロエはダイアのおでこの唇を添えた。
子供のころよくやってくれたこと。
これをしてほしいがために、この兄弟はよく家の手伝いをしたものだった。
そしてあらんかぎりの力でほほ笑んだ。
しゃべることもままならない彼女が見せた笑顔は、儚くも……いや、儚いからこそ最高に美しいものだった。
「だ…から、生きてね。私のさ…いあい…のおと…うと」
「おねぇぇぇぢゃーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!!」

これが、彼の行動原理。
帝国を憎み、壊そうとする彼の全て（過去）

# 恩人を狩る！

「あれからもう2年経ったよ、姉さん、ケイ」
ダイアたちの住んでいた町から数キロ離れた山の中。
そこにそれはあった。
２人の墓
「おれ、この2年で強くなったよ。特級危険種だって余裕で倒せるし、あ、そうそう、一度だけだけど超級危険種も倒したんだ。まぁその時は流石に骨折しちゃったけど」
ダイアはこのだれにも見つからないような山奥に、２人の墓を建ててから一度も顔を見せに来ていなかった。
弱いままの姿を彼らに見せたくなかったなのかもしれない。
彼はこの2年間、一人で山にこもって腕を磨いていたのだ。
「姉さんたちは俺が今からやることをきっと必死になって止めたと思う。でもさ、≪三人の誓い≫第６条、己の正義に従え、だろ。あの事件の後考えたんだ。正義って何なのか」

強くなって堂々と顔を見せ、ぽつぽつと今は亡き二人に話しかける。
「正義ってのは結局、信じているものなんだって俺は思ったよ。だからさ」
彼の顔は正しい答えを見つけたというよりも、開き直ってしまったかのような清々しさがあった。
「俺の正義ってのはもう過去にしかないんだと思う」
こぼれるように笑顔になる。
「俺は壊すよ。俺から過去（正義）を奪ったものを、この国を」
顔は笑顔のままだ。
しかし、目には水滴がたまっていた。
「ほら、姉さん。ケイ。俺は今から復讐のために全てを壊すんだよ」
二人の墓を涙で濡らさないように必死で上を向く。
「止めてよ。止めてくれよ、ケイ、お姉ちゃん……」
ダイアの涙は止まらない。
彼は危険種に両親を殺され、帝国の人間に姉と弟を殺された。
しかし、両親にしろ姉、弟にしろ一緒に育ってきた環境は悪くなく、むしろ彼の生活はとても真っ当なものだった。
だからこそ狂気に染まらない。

染まりきることができずに救いを求めてこんな山奥にまで来たのかもしれない。
ひとしきり泣いた後、彼は歩き始めた。
大きな決意を持って、全ての悪を狩るために。

「かたき討ちをするつもりなのか？」
山を抜けようというところで不意に声が聞こえてきた。
「…おっちゃん」
声の方向にいたのはエンジだ。
狩りの途中でダイアのことを見つけたのか、服のいたるところに危険種のものとみられる血痕が付いている。
エンジの風貌は2年前と全く変わってなく、とても懐かしく感じた。
だが、再開を喜ぶような雰囲気ではないことをダイアは理解している。
「そんなことしてロロエとケイが喜ぶとでも思ってるのか！」

……昔、よくこんな感じで叱ってくれた。
血のつながりも無い彼ら兄弟を、真剣に正しい方向柄導いてくれたのはこの男だった。
そして、だからこそこの問いに対してもダイアは真剣に答える。
そんなことわかりきっている。
彼はよどみなく言い切った。
「喜ばないよ……断言できる」
「だったらな……」
エンジの言葉を遮り、ダイアは続けた。
「知ってる？おっちゃん。死んだら感情なんてなくなるんだよ？」
「……」
俺はそういうことを言ってるんじゃない！エンジは怒鳴ろうとした。
しかし、ダイアの纏っている雰囲気が持つ妙な説得力のせいでそれを行うことなどできなかった。
「だから二人のためにするんじゃないんだ。俺はただ自分のためにこの国をつぶすって言ってるんだよ」
「……お前ひとりに何ができる？」

「できるできないじゃなくて、俺がやりたいからやるんだ」
「ふざけるな！お前まで死ぬことなんてない、考え直せ！どうしても行くって言うなら力ずくで止める、お前の姉と弟の尊厳を保つためにも！」
剣に手をかける。
帝具を持っていないにもかかわらず、帝具所有者のロロエと同格の強さを持つと言われたエンジが……
「ワリいな、おっちゃん。おっちゃんじゃ俺は止められねぇ。俺を止めることのできる人間はもういないんだ」
ダイアも右手の腕輪（ガントレット）に手を添える。
とても愛おしそうに、そしてとても悲しそうに……
「安心しろ、気絶する程度にしてやる」
「じゃあ俺もそれぐらいにするね、……エアリアル!!」

風を纏う。
この帝具を使うのは超級危険種討伐以来、久しぶりだった。
理由は簡単で、帝具に頼り過ぎると当たり前ながら弱体化してしまう。
だからダイアは基本的にピンチにならない限り帝具の使用を控えていたのだ。
「この国腐ってる。だけどな一番大事なのは命だ。……もう一度言う、考え直せダイア！」
「2年間、考え直し続けた結果、こうなったんだ。もうその必要はない！」
「だったら行くぜ、肉体言語でのお話だ！」
一瞬
話に気を取られたとしても、ほんの一瞬の出来事だった。
エンジは持っていた剣をダイアに向けて振り下ろした、ただそれだけだ。
それだけでダイアは吹き飛ばされて木に背中をぶつけるという状況に陥った。
……エアリアルを展開していたためダメージはほとんどなかったが。
「……っく!?な、なん…」

そう、エアリアルを展開させていたのに何故攻撃が当たるのか。
普通だったら剣のほうが風圧に負けて弾き飛ばされているはずだ。
「あ？そんなの簡単だろ。風の壁があるっていうならそいつごと斬ってやればいいんだろ？」
言っていることが無茶苦茶だ
かなりの強度を誇るエアリアルの膜を纏った人間を弾き飛ばすなんて芸当はそれこそ、数トンのトラックを弾き飛ばすのと変わらない力が必要なのだ。
この状況を冷静に理解して、ダイアは自分が大きな思い違いをしていることに気付いた。
相手は自分が最強だと思っていた姉さんと同じ強さなのだということを。
「ごめん、俺、おっちゃんのこと甘く見てた……と言うかたぶんうぬぼれてたんだと思う。だから本気で行くよ」
ダイアも剣を抜く。
そこもやはり風が覆い尽くした。
「死なないように頑張ってね」
「まだ成人もしてないような若造には負ねーよ！」
何の変哲もないエンジの剣と帝具（エアリアル）の力を纏ったダイアの剣がぶつかる。

だが、やはりエンジの剣は風圧によってはじけ飛ぶことなどなかった。
「ダイア！こんなの使い古された言葉かもしれないがな……復讐からは何も生まれない！」
剣まで抜いてもやはり説得をあきらめられないエンジはダイアに呼び掛ける。
しかし、もはやダイアの意志を曲げることなど出来やしなかった。
「何も生まれないとしても、今あるものをぶっ壊せるならそれで十分だ。だから俺は行くよ。エアリアル≪解放≫」
その一言を鍵として彼の纏っていた空気は一斉に解放される。
半径１０メートル近くの木は全てはじけ飛び、エンジも大きく後ろに後退をしてバランスを崩した。
……こんな勝ち方卑怯かもしれない、でも俺には止まることのできない動機があるんだ。帝具がなかったら本当ぼろ負けだったよ。
そしてそのままダイアは右手に持った剣を振り上げる。
エンジはバランスを崩しながらもしっかりと頭を守った。
「じゃあね、エンジさん……止めてくれてありがとう」
がら空きになった胴体に左手が深く食い込み、そのままエンジの意識を刈り取った。

エンジを安全そうな場所に横たえるとダイアは持っていた危険種からの採取物を傍らに置き、静かにたちあがる。
きっとせめてもの償いのつもりなのだろう。
「俺、おっちゃんのことも姉さんとケイの次に好きだったよ」
それは彼がエンジに向けて言った最後の言葉となった。
腐りきった帝国の本拠地、帝都
全ての元凶を狩るために……。
後ろ髪をひかれる思いを打ち消すようにダイアは光らずよく歩いた。
たった一人の≪復讐者≫として

# 情報を狩る！

「ここか、予想はしてたけどやっぱでかいな」

徒歩で丸２日

ダイアは道中、危険種を狩り食料として歩き続けることによって、帝都に到着した。

出てきたのはどれも２級以下でダイアには退屈すぎた旅だったのだが。

「まずはあの二人だ……」

二人と言うのはもちろん、セリューともう一人いた男だ。

あの二人だけは自分の手で殺さないと気が済まない。

そのためには情報収集。

情報屋を探すための聞き込み。

だからと言ってむやみに情報屋を知らないか？と聞いて回るのも愚策だろう。

そんなこんなで彼はとりあえず、拠点となる宿を探すことにした。

「おう、兄ちゃん！金貸してくれねーか？」
そんな声が聞こえたのは帝都のメインストリートに入る直前の路地だ。
初めて入る帝都の大通りだけに少しわくわくしていたので不快感をあらわにした。
ちなみにダイアが田舎者だからと言って流石に第一声から、こいつらが金を脅し取ろうとしていることは容易に理解できた。
「うるさい黙れ！」
イラついた。
ダイアは大いにイラついた。
金を取ろうとする悪党のことを許せないと思ったのではない。
自分が弱いと思われたことに怒っているわけではない。
ただ単純に兄と呼ばれたことが気に食わなかっただけなのだ。
（ついでにわくわく感に水を差されたため）
だがそれを只の強がりと取ったらしくチンピラ達はゴキゴキと手の骨を鳴らした。
「あ？こっちは3人いるんだぞちょーし乗ってっと……」

ボコッ！ドガッ！ゴシャーー！
「「ちょ―しのってすんませんでした!!!!」」
秒殺……いや、殺してはいないが、
危険種狩りにひとりで行ける者がカモにされるほど、この街のチンピラは強くなかったらしい。
「おう、謝ることはいいことだな。姉さんも言ってたし」
先ほどまでのイラつきは、チンピラどものきれいな顔を犠牲にしてきれいさっぱり消え失せた。
おかげですごくいい笑顔だ。
しかしその変りように顔面がつぶれたトマトみたいになっているチンピラ達はついていけないのか訳のわからない（物理的にも精神的にも）顔をしている。
「…え？あ、は、はい。そ、そっすね。あの、わたくし達はこれで失礼してもよろしいでしょうか？」
まさにかませ犬みたいな登場をしてしまったが、これ以上ここには居たくないのだろう、慣れない敬語を使いチンピラはダイアの様子をうかがった。
「ちょっと待て」
「は、はい。そうっすよね。こんなこととしてこのまま帰るっていうのはやっぱり無

礼ってやつですよね……でも俺たち金はないんです、だか」

何を勘違いしたのか、急にチンピラの一人が平謝りする。

「いや、そんなことじゃなくてだな。なんかいい宿を知らないか？値段は気にしなくていい、ついでに言うと情報屋について知っていたら何か教えてくれ」

「……へ？」

予想外の質問だったらしい。

まぁよく考えたらそうだろう。

誰が、カツアゲをしようとした相手に返り討ちにされて、宿屋はどこか？と聞かれるなんてことを想像できようか。

それだったらまだ、返り討ちにされてそのまま殺される方が想像しやすいだろう。

「知らないのか？」

「……し、知ってます。これは噂なんですけど情報屋もやっている宿屋を知ってます！」

なんかよくわからないがこれ以上ぼこられないで済むかもしれないということは理解できたのか、さっきから黙っていたチンピラが急に口を開いた。

しかし、今の情報がほんとうだとしたら面白い。

宿屋の情報だけでなく、あまり期待していなかった情報屋の情報も入り、しかもそれ

が同じ場所だというのだ。
「≪ユートピア≫っていう宿屋なんですけど、宿泊料金に上乗せすることで情報を教えてくれるらしいんですよ」
「本当か！」
疑い半分、期待半分。
「や、宿屋の方は本当です。ですけど情報屋のほうはさっきも言った通り噂話になっちまいます」
とりあえず言ってみる価値はありそうだ。
行ってみてダメだったら情報屋のほうはまた新しく探せばいい。
「……そうか、ありがとよ！これは少ないが礼だと思ってくれ」
そう言って金の入った小さな袋を中身ごと放ってその場を後にした。
≪３人の誓い≫第４６条
恩を受けたら必ず恩で返せ。
一人になった今でも彼は≪３人の誓い≫を熱心に守っていた。
「……なんだったんだ？」
チンピラ達は当初の目的だった金が手に入った喜びよりも、さっきまで目の前にいた男への理解が追い付かず、まるで狐につままれたような気持ちで３分近く立ち尽くして

いた。

宿屋≪ユートピア≫
木造２階建てで部屋数は６
しかしあまり儲かっていないのか、その半分が空室だった。
「とりあえず１０泊ほど取りたいんだけど大丈夫？」
「はい、開いていますよ。朝食と夕食のほうはどうなさいますか？」
受け答えしてくれたのは４０代ぐらいになるであろう男性だった。
「お願します」
ダイアは一般男性と比べて料理は得意な方だ。
……と、言うのも自らの姉が壊滅的な料理音痴であった為、そうならざるを得なかった部分もあることにはあるだろうが。

まぁなんにせよ、台所も無いだろうし、何よりも情報を集め、行動するために時間を使わなければいけないためこの申し出はとてもありがたいものだった。
そうして、宿泊の手続きをすましたところで、ダイアは一番聞きたかったことを聞くために周囲の様子をうかがった。
向かい合い、少し話してみてわかったのだがこの男が只の宿屋のオーナーであるとは思えないのだ。
なんというか、エンジの似たようなにおいをダイアはこの男から感じ取っていた。
そうして目線がない事を確認するとダイアは思い切って聞いてみた。
「情報屋、片目がつぶれていて『隊長』と呼ばれる身分の奴を知っているか？」
とりあえず、男のほうに的を絞る。
セリューのほうは帝具を持っているのでいきなり勝負を挑むにしては相手が悪い。
戦いの回数なら負けていない自信はあってもダイアの場合は危険種が相手の場合がほとんどだ。
これでは同じ帝具使いでも対人戦闘に優れている軍人と闘うのは大きな危険が伴うだろう。
それならば、まだ帝具を持っていなさそうだった男のほうを狙った方がいい。
だがまぁ、急に質問を投げつけてしまったのだが、これでこの男が情報屋でなかった

らいい笑い物である。
そんなダイアの心中とは裏腹にこの男はなんのよどみも無く言い放った。
「それはきっとオーガ様のことです」
「オーガ？」
本当に情報屋であったことに安堵したが顔に出さないように気をつけながらそのまま質問を重ねた。
そうすると情報屋はより詳しく弟の仇についての情報を離してくれた。
いわく、かなりの剣の使い手で≪鬼のオーガ≫と呼ばれ恐れられている。
いわく、無実の人を犯罪人に仕立て上げ処刑を繰り返している。
そして最後に、姉の仇であるセリューの師でもあるらしかった。
「そいつはいつもどこにいるんだ？」
オーガを狩るためのプランを練るために詳しい情報を聞き出す。
「部下の多くと一緒に詰め所にいますね。休日は酒飲みによく街に出るようですが……」
と、なると勤務日に奇襲をかけることは無理だということか。
狙うとしたら休日だな。
ダイアはそう考えて、新たな質問をぶつける。

「最後に次の休日がいつかだけ教えてくれ」
そうすると情報屋は初めてノートの様なものをペラペラと開いて情報を探した。
流石にここまで細かいことまで完全暗記することは難しいのだろう。
「ええと、今日から数えて15日後ですね。昨日、休日だったばかりですね」
タイミングが悪かったようだ。
だがしかし、今日だけで拠点となる宿屋と頼りになる情報屋を発見できたのだから大快挙だろう。
「わかった、ありがとう」
「それで、ご宿泊代金のほうですが……」
先の情報にどれほどの価値があったかはわからない。
しかし危険種の素材を売って稼いだ金にはまだまだ相当な余裕があった。
足りなくて馬鹿にされるぐらいだったら多い方がいいだろう。
そう考えてちょっと多い金額を指定した。
「ああ、宿泊料6倍でいいか？」
一瞬この男が目を見開いたのを彼は見逃さなかった。
……ヤバい、相当破格の値段を提供してしまったようだ。
「ご利用ありがとうございます」

だがしかし、自分の中ではそれほどの価値があったのだと言い聞かせて納得することにした。

約2週間後、2年間止まっていた彼の時間がやっと動き出す。

# 休息を狩る

「おや、お客さん?どこに御出掛けですかな」

帝都に来てから5日が経ったある日、ダイアはこれまでの時間、周りの聞き込みもそこそこに2日間歩き続け消耗した体力を取り戻すため、多くの時間惰眠をむさぼった。

だが流石にこれでは腕……と言うよりも身体がなまってしまうと考えたのか今日は外に少し散歩しに行こうといていた。

「ああ、少し帝都の様子を見たくなってね。色々と散歩してくるよ」

「そうですか、……まぁ、お客さんほど強いんだったらそんな心配も無いでしょうが一応物騒ですので気を付けてくださいね」

本当に一応というような口ぶりで念を押された。

情報屋が言うのだからこの情報にもウソはないのだろうと、彼は忠告を有り難く受け止めた。

「夕食までにはちゃんと帰ってくるから。またおいしいご飯をよろしく!」

「はい、家内のほうが聞いたらきっと喜びます。では行ってらっしゃいませ」

……うん、なんでこの人はこんなにへりくだってまで宿屋をやっているのだろう？

他人事だがダイアには疑問に思わずには居られなかった。

この間のチンピラとの一件があったあとすぐに≪ユートピア≫に行ってしまったため結局ダイアは帝都のメインストリートを回ることはできないでいた。

なので改めて考えてみれば今日彼は初めて帝都の（商業という意味での）中心と言うものを見ることになる。

≪ユートピア≫のある路地を抜けてまっすぐ1キロ、そうして十字路を右に曲がるとそこにお目当ての通りがあった。

通りの左右に敷き詰められた服店、防具屋、武器屋などの多くの店。

そして現在は不景気だといわれているにもかかわらず活気にみちあふれている。

ちなみに彼のいた町は、ほとんどの人間が狩りを中心とした生活をしていたため日用雑貨を取り扱う店しかなかった。
だからこそこのような光景自見るのは初めてなのだ。
「す、スッゲーな……って、あれはなんだ？」
ダイアの目に飛び込んできたのは１０メートルぐらいのふらふらと揺れる塔だった。
「あれはお嬢様の買い物よ」
ひとり言のつもりでつぶやいたのだが、急に隣から返答が聞こえた。
……なるほど。塔ではなくてただ買ったものを積み上げただけか。
いや、そっちの方が驚くことなんだろうけど……
「アリアっていうお嬢様でよく買い物の山を作ってるわ」
追加で説明してくれる。
いや、あれを結構な頻度で作り上げてんのか……
つくづく帝都は解らないところだとダイアは思う。
「で？あんたは誰、恥ずかしながら俺って同年代で異性の知り合いなんて一人もいないはずなんだけど？」
「そうね、ここで『僕たち以前どこかであったことある？』なんてテンプレのナンパなんてされたら一発ぶん殴ってる所よ」

……おおう、そっちから話しかけてきたのにずいぶんな仕打ちだな。
ダイアは顔をひきつらせながら、拳を握りしめている彼女を見た。
少し赤みがかった髪色に、肩までは届かないようなショートヘア、そして何よりも半袖にショートパンツという、明らかに肉体労働系の女の子だった。
「あたしはあんたが泊っている宿屋の娘よ。名前はアーシャよろしくね、ダイアくん」
ダイアは自分の名前を急に呼ばれて反射的にこの相手についての警戒心を強めた。
……がいったん落ち着いて考えてみると、自分の名前など親に聞いた、または宿泊者リストでも見れば簡単に確認できると思いなおして警戒を解く。
「あ、ああ。で、その宿屋の娘のアーシャさんが俺に何の用ですか？　……ちなみに俺のことは呼び捨てでいい」
特に理由はないのだが、彼は「さん」や「くん」などをつけられることをあまり好かなかった
弟であるケイすら彼のことは「ダイア」と呼び捨てで呼んでいたほどだ。
「ならあたしもアーシャでいいわ。……お父さんが暇ならあなたの案内でもしてきなさいだって、ダイアは帝都来るの初めてらしいじゃん？」
「ああ、そういうことならよろしく頼む。正直言ってどこに行けばいいのか全く考えていなかったんだ」

きっと、宿代を多く払ったことに対しての彼なりの感謝なのだろう。
そうダイアはおもってありがたくこの好意を受け取った。
そして同時に、彼は一つのことが気になった。
「一家総出で同じ職業をやってるのか……いいな、そういうの」
家族と呼べるものがもう一人もいない彼にはとても輝いているものだ。
彼は自分で意識はしていなかったが左手を右手にはめられた腕輪（ガントレット）のほうに添えていた。
しかしアーシャにはそんな彼の状況を知る由すらない。
「そんなにいいもんじゃないよ。未来はこのまま決められてるし、この不景気でもうからないし、たまにお父さんが出稼ぎをして手に入れるお金で何とか生活ができている程度だよ」
……なるほど、情報屋をやっているということはこの娘には秘密にしているんだな。
情報屋を脅せるかもしれないネタを手にして少しダイアは得意げになる。
だがしかし、心の中に渦巻くやるせなさは一向に影を潜めようとはしなかった。
「それでもきっと、いいもんだ……」
ダイアはほほ笑む。
彼の目に映っている感情はきっと憧憬だ。

アーシャを、そして過去の自分のことをうらやましいと思っている。
そんなダイアの顔にアーシャも察したようだ。
「あなた、家族を……」
「ああ、2年前に」
両親を失ったのはもっと前のことだが、彼が物心着いた時はロロエとの生活が始まっていたのだ。
彼は家族と言われると、両親よりも義姉や弟のほうが先に出てくる。
だからこそ2年前としか言わない。
「……ごめんなさい」
「どうして、謝るんだ？あいつらの仇は別にいる。……まぁ、そいつらが謝ったところで許す気なんて全くないんだけど」
ダイアたちが育った町には空気を読むといった習慣はない。
だからこそ、アーシャが謝った理由が本当に解らなかった。
「……そう、かたき討ちするつもりでこの街に来たのね」
この娘はなかなか勘が鋭いじゃないか。
そう彼は思った。
「そうだよ、止めないの？」

止まる気なんて全くないのだがそれでも一応聞いてみる。
ここがきっとダイアの弱いところなのだろう。
「わざわざ聞くってことはもう充分考えた後ってことだよね。そんな状態で赤の他人のあたしが止めたところで意味なんかないでしょ」
「アーシャは本当に察しがいいんだな」
さっき思っただけで口に出さなかった言葉を、今度ははっきりと言葉にした。
「宿屋で働いていれば必然といろんな人を見るからね。察しも良くなるってもんでしょ。じゃあそんなことよりも今日を楽しみましょう。さっきあなたが言ってたのは私も同じで同年代の男友達ってなかなかいないの、ちなみにお金はどれくらいあるの？」
自分の財布を出しながらダイアに聞いてきた。
そこにはパンパンの硬貨が詰まっている。
……さっき生活がぎりぎりとか言ってなかっただろうか？
しかしダイアには彼女に一銭も使わせる気なんてこれっぽっちも無かった。
「まぁ、女の子を1人満足させるくらいの量は持ってるよ」
「え？でも、自分の分は自分で払うよ。なんか臨時収入が入ったらしくてお金に余裕があるし」

臨時収入とは間違いなくダイアの宿泊代（情報代込）のことだろう。
なるほど、財布がいっぱいだった理由が分かった。
「お礼だと思ってよ。幸い危険種狩りで手に入れた金がまだたくさんあるんだ」
嘘ではない。
半分近くをエンジにあげたとはいえ、村の近くで出る第一級危種の素材をかなりの量持っていたのだ。
下手したらちょっとした商人ぐらいの金は所持している。
「……じゃあ、お願いしようかな」
自信満々でおごるアピールをしてくるダイアに対してアーシャはいっそ後悔させてやろうと心に決めてダイアの提案をのむことにした。
「りょーかい、その代わり面白い所に連れて行ってくれよ」
楽しそうに言う彼の顔には笑みが浮かんでいる。
それはゆがんだ笑みではなく、年相応のと言うよりも、2年前と同じ実年齢よりも若い無邪気な笑みだった。

# 隊長を狩る！

「ついにこの日が来た……」

ダイアが朝起きて初めて放った言葉はこれだった。

今日はダイアが帝都に入ってから１５日目、そう、オーガの休日。

そして奴の命日になる日だ。

まだ日が出たばかりなのに朝食も取らずに外に出る。

アーシャとはあの日に思いっきり遊んだ（所持金の半分近くがぶっ飛んだ）あと、宿屋の方が忙しくなって長い事話す時間が確保できていなかった。

今まで世話になったのだから攻めて一言声をかけておくべきなのだが、そうも言ってられない。

彼は２年前からオーガに顔を覚えられているかもしれないのだ。

そのため直接声をかけることはできない。

街中で殺すこともできない以上、ストーカのごとく影から隙を狙うことしかできない。

だからこそ、早めに彼を見つけておきたいのだ。

今日殺しておかないと、また2週間も待たなければならない。
そんなのは御免だった。
もう2年も待ったのだ。
この2週間、一人でいるときにはどうしても黒い感情が胸の中で渦巻いてもういっそこのまま殺しに行こうと何回思ったことか。
「それも今日で終わりだ。これを終わりにして。俺は全てを始める」
誰に言うまでもなく。顔を出し始めた太陽に向かって静かに、そして何よりも激しく宣言した。

「ダイア……」
きっと今日なのだろう。
あの日、ダイアが言っていた仇を殺すのは。
地方から親族の仇打ちをしようとやって来た人物を少ないながらも宿屋の娘である

アーシャは何人か見てきた。
そのうちの８０％は相手に殺されてしまったということも彼女は知っている。
近頃の態度からもうすぐ行動を起こすのだということは分かっていたのだが、これほどまでに朝早くに出て行ってしまうとは予想ができなかったようだ。
彼女が気付いた時にはもうダイアは外にいた。
彼の目を見て、彼女は何も言えなくなる。
「ダイア……」
もう一度つぶやいた。
やはり、仲良くなった友達が死んでしまうのは彼女も嫌なのだろう。
結局ダイアが見えなくなるまで、一言も声をかけずに宿屋の中でずっと彼のことを見つめていた。

午前９時

……自宅から移動、道は基本的に大通りしか通っていないところから考えるとここでのアタックは危険と判断、

ダイアは何もしかけずに様子を見る。

ギリギリと、歯ぎしりが裏路地にこだまする。

奴の顔を見るだけで今にも襲いかかろうとする本能を理性が食い止めていることが分かった。

「ケイ、待っていろ。もうすぐそっちに、このゴミ屑を送ってやるからな」

興奮を抑えるために小さくつぶやく、しかし破壊衝動が沈静化することはなかった。

「待っててくれよ……ケイ」

午後1時

……1つ目の飲み屋を出て2件目を物色中

やはり大通りしか通らない、オーガが通る場所のみ空間が開く。

情報屋がくれた情報通りにそれなりに恐れられているらしい。
「大丈夫だ。落ち着け俺。夜になれば辺りも暗くなる。そうすれば狙うチャンスも増えるはずだ」
自分に言い聞かせるようにダイアはつぶやいた。
焦るのは仕方ないがここでミスするわけにもいかない。
ダイアはじっと耐え抜いた。

午後４時
……３件目の飲み屋に入る。
かなり泥酔しているようだ。
もう少しで日が落ちる。
この泥酔の仕方からいって一人になってくれさえすれば簡単に仕留めることができる。
そう思った。

だが、ここでも結局いいチャンスには恵まれなかった。

午後6時

……4件目を物色中に一人のフードの男が接触、何やら耳打ちをしていることを確認

何やら裏路地に移動。

「よし、チャンスだ。隙を窺ってオーガを狩る。あのフードも邪魔するようなら殺せばいい！」

もうすでに半日以上弟の仇を目の前にお預けを食らったのだ。

ついでに、もう一人殺してしまうことを気に掛けないほどダイアの憎悪は高まっていた。

「マズハヒトリメダ」

ダイアが標的に向かって歩き出すのと同時に、フードの男……タツミが剣に手をかけていた。

刹那。

タツミとオーガの身体が交差する。

「っっっっ!?……速い、だが甘いな」

一瞬、先を越されてしまったのかと焦りを覚えたが、オーガがまだ生きていることを確認して安心する。

もうこれ以上見ているわけにもいかず、一仕事終えたダイアは進むスピードを上げた。

だが、タツミのほうはオーガが生きているとは思ってなく、そのまま帰ろうと奴に背中を向けていた。

見ず知らずの奴が殺されようと関係ない。

そう思ったダイアのところに飛んできたのは振り下ろされたオーガの剣にギリギリで対処した、タツミだ。
「誰だ!?オーガの仲間か!」
タツミは現状が理解できていないのか、ぶつかったダイアに向かってそんなことを口にした。
「おいてめぇ、なにほざきやがる。次そんなこと言ったらお前から狩るぞ」
そう言い、こちらに構えられていた剣を帝具の力によって弾き飛ばす。
「おいおい、どうなってんだよ。オーガは甦るし、変なやつは出てくるし」
「変な奴呼ばわりはひどいんじゃねーか?あとあの糞野郎に限ってはそもそも死んでない。お前がへぼだからな」
ダイアに限っては思ったことをそのまま言っているにすぎない。
「なんだと!やるのかよ!」
馬鹿にされたと感じたタツミはダイアに食ってかかる。
だがダイアにはそんな挑発につきやってやるほど暇じゃない。
「あいつ殺した後で相手してやる」
「誰を殺すって?」
彼らが話している隙にオーガは近づき、剣を振り上げていた。

先ほどタツミを吹き飛ばした剣筋と全く同じものが、ダイアを襲う。
しかしダイアの風の膜はそれをきれいに受け止めていた。
確かに剣の腕はなかなかで、重いことには重い。
しかしエンジほどではない。
彼は風の膜ごとダイアを吹き飛ばしたのだ。
だがオーガはせいぜい拮抗する程度（それでも酔っ払っている状態でこれならば十分すごい事なのだが……）
「てめえだ糞野郎！」
一発殴る。
能力が付与された殴打は人間が出せる筋力値をはるかに超えた威力を持ち、オーガを後ろの壁にめり込ませた。
「ツカハ!?……な、んだと!?……そ、その帝具には見覚えがある、ぞ……」
ダイアが右手にはめている腕輪（ガントレット）をみて、驚きとともにオーガは口にした。
「ああ、≪疾風迅雷≫エアリアル、お前たちが2年前に殺した俺の姉さんの形見だ！」
「お、お前、お姉さんを……」
今まで見ていたタツミが思わず、ダイアに声をかけた。
「ああ、姉と弟をこの糞野郎ともう一人の女にな……だからお前は手を出すな。出す

んだったらお前から殺す」
タツミはダイアの剣幕に思わず喉を鳴らした。
……こいつはやると言ったらやるぞ。
タツミにそう思わせるだけの何かをダイアは持っていた。
そうしてタツミとダイアが話している間に、オーガは壁から抜け出した。
いや、ただ殺してもつまらないと思ったダイアはその行動を待っていたわけなのだが……
「っは！仇打ちか、そんなことして結構なことだな。だが俺にかたき討ちをしに来たやつらは全員この剣のシミになった。解るか？お前が俺を裁くんじゃない、俺は人を裁く側の人間だぁぁぁ――――！」
あの日見た、ゆがんだ笑顔。
撃ち込んだ銃弾は的確にケイの心臓を打ち抜いた。
……思い出すだけで吐き気がしてくる。
「裁くなんて高尚なまねはしない。俺はお前を殺せればそれでいい」
オーガを睨めつけながら鋭く言い放つ。
「言ってろ」
……いくらガキと言っても帝具持ち、ここは何とか逃げ延びることが先決だ。

オーガはそう考え笛を鳴らした。
きっと仲間に居場所を伝えるためのものだろう。
「無駄だ……」
「何を言ってやがる、それはお前らだ。警備隊の中にはあの女を殺した帝具持ちの奴がいる。そうなれば互角……いや、人数的な意味で俺様のほうが有利だ！」
「そんなことは関係ない。……東の空が明るいのが見えるか？」
「ああん、確かに明るいがそれが何の関係がある？」
相手が余裕を持ちすぎていることを不審に思ったオーガは言われたとおりに空を確認した。
「火事だよ、俺が火を放っておいた。あの騒ぎで笛の音なんか聞こえちゃいねえ、聞こえたとしてもあっちの方が急務だろうな……」
そう、ダイアがここに来るのが遅くなったのは火を放ったからだ。
しかしこれには今まで静かに見ていたタツミも黙ってはいられない。
「お、おい。お前今火をつけたって……」
「ああ、安心しろ。ただの帝国の一議員の家だ」
タツミが聞きたかった回答とは全然違うものだった。
だがしかし、国の要人ともなれば仲間の危険を救っている場合でない事は確かだっ

た。

「ばっ!?関係ない奴を巻き込むのか！」

「関係なくない。俺の復讐対象はこの国の全てだ。悪い議員は殺されて当然だ！……というわけで、オーガ。お前はここで死ね」

タツミへの返答もそこそこに、ダイアはオーガにと向き直る。

「ふざけるなよ！この糞ガキが！この俺様を！殺せるわけがないだろぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！」

「≪エアリアル≫」

そういうだけで、ダイアの姿はかき消える。

見えないレベルのスピードで前へと走り、彼の手は、オーガの腹を貫いた。

エアリアルの纏う風の形状は仕様者の意思によって変えることのできる。

ダイアは何よりも鋭く、そして風を右手に集約することによって強固に変形させたのだ。

「こ、のまま済むと思うなよ……。ぜったいころ」

「黙れ、お前の言葉に価値なんてない。≪解放≫」

身体に突き刺さった手から、大量の風が放出される。

「ぐおおおぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!!!!!」

身体の内側から、文字通り内臓をぶちまけてオーガは息をしなくなった……。

意外にもこれがダイアが初めて人を殺した瞬間だということは……彼自身を含めて……だれも気付いてはいなかったのだ。

# 協調を狩る！

ダイアの心の中に浮かんだのは達成感だけだった。
だが、その達成感は決して気持ちのよいものとは限らない。
彼は分かっていたのだ、こんなことをしてもだれも喜ぶことがないのだということに……
だからこの行為は自己満足に過ぎない。
解っていたはずなのに……
「おい、さっき『やんのか？』とか言ってたが、俺から聞くぞ。……やんのか？」
とりあえず今は余計なことは考えないようにする。
そんなことは一人になった時に考えればいい事なのだから……。
ダイアは顔を血で濡らしたまま、タツミのほうに顔を向けた。
「す、すいませんでした……」
あっちはびくびくしながら彼のほうに頭を下げた。
その怖がりようが滑稽だったのか、それとも安心させようとしたのか、ダイアは顔を崩して笑みを作った……血まみれの顔で。

「いいさ。結局お前は最後まで手を出さないでくれたしな。獲物を取って悪かったな……」

「……なんか、あんた。さっきまでと性格違うくないか？」

血まみれの顔で笑顔を向けられるというより怖くなった状況を無視して、タツミは質問をする。

「え、ああ、うん。あれは激昂してたからな。仇とは言えあそこまで理性が吹っ飛ぶなんて思ってもなかったよ」

少し恥ずかしいのかダイアは首筋をポリポリと、掻いた。

そしてダイアは誤解されることが嫌だったのでそのまま続ける。

「あれだぞ。別に2重人格ってことじゃないぞ！」

さっきはマジでそれを疑うレベルで怖かったんだぞ！……とはタツミは言わなかった。

「……ま、まぁ、いいや。俺はタツミってんだ。あんたの名前を教えてくれないか？」

基本的に殺し屋は名前を教えてはいけなかったのだが、彼にだったら大丈夫と判断したのかあっさりとタツミは自己紹介をした。

ダイアは少し考える。

考えた結果、オーガと対立していたことからも彼が帝国の人間ではないと判断したダイアは素直に名前を言う。

「俺はダイアだ」

何やら名前を聞き出せたことがうれしいのか、タツミは小さくガッツポーズをしていた。

……いや、そういうのは見えないところでしろよ。

「ダイアか……ところでダイア、おれたちは国を変えたくて殺しをしている集団なんだ」

「聞いたことがあるぞ……ナイトレイドの一員なのか、お前？」

一般的にはただの殺し屋集団と言われているナイトレイドだが、反乱軍の一組織と言うことまでダイアはつかんでいた。

もちろん、あの宿屋兼情報屋からの情報だ。

「ああ、俺はまだ入ったばかりだけどな」

……納得。さっきのオーガとの戦闘を見る限りでは、せいぜい中の上程度の強さしかなさそうであったから、もともとプロとは思っていなかったが。

そんな失礼（？）なことを考えているとタツミがそのまま続けた。

「ダイアもナイトレイドに入らないか？」

「いやだ」
「即答!?」
絶対いやだ。
グループに入ったら、そこの指揮に従わなければならない。
そんなのは個人的な復讐を実行途中のダイアにとって足かせにしかならない。
そして何よりも、ナイトレイド（こいつら）とダイア（俺）には大きな違いがあった。
「お前今、帝都を変えたいって言ったよな？」
「？、ああ、そう言ったよ」
なんでそんなことを聞き返してくるのか理解できなかったタツミは一旦、首を傾げてから答えた。
「俺はそんなこと望んでいない」
「んなっ!?……ダイアは今の国の状況を知ってるのか？」
思わず聞き返した。
タツミには信じられなかったのだ。
帝国の人物でなく、あれほどの力を持ち、尚且つ事情を知っているのにこの国を変えようと思っていない人がいることに。
「知っているさ。はっきり言って最悪だな」

「だったらなん……」
「俺は復讐のためだけにこの国をぶっ壊すんだ。この国が腐って、それを憂いて、どうにかしようなんてことはどうでもいい」
「……」
絶句。
この言葉はこの場面のためにあるんじゃないかと思うほど見事な絶句だった

「ダメだったから立て直す、そんなのやるつもりはないよ。ダメだったら捨てればいいんだよ。この国ごと、完全にぶっ壊してさ」
「本気でそうい思ってるのか?」
言っていることが似ているはずなのに、やろうとしていることは全然違う。
途中までは同じかもしれない。
悪い奴らを殺していく。
ただ、彼らのシナリオの最終的に行きつく終着点は全く違っていた。
再生か滅亡か。
「本気だ。俺はこの国に壊されたぞ。もう、直すことができないほど決定的にな。だから俺はやられたことをそんのままやり返す」

「一人でか？」
「……なんか前にも誰かにそんなこと聞かれたな。……ああ、一人でだ」
ダイアは故郷の恩人の顔を思い浮かべながら答える。
「そっか……」
「そうだ」
「じゃあ気が向いたときにまた声かけてくれよ、まぁ、俺が決めていいことじゃないんだけどさ」
「そんときにお前が俺の近くにいたらな」
そんなことなんてない。
二人ともそのことに気付いていたが声にすることはなかった。
「じゃあな、東が暗くなってきた。そろそろ火事の火が収まるんだろう。お前も早くずらかった方がいいぞ」
そう言ってダイアは歩きだした。
だがしかし、心の中にはやはり、納得しきれない達成感が渦を巻いていた。

「あ!?やべえ」

そう言って彼は、メインストリートの直前で急遽エアリアルを起動

「ふう、セーフ」

もし、気付かずにそのままにしていたらメインストリートは悲鳴だらけになっていただろう。

……血にまみれたその顔を…

「……これが俺が見てきたものの全てです」
タツミはアジトに変えると、すぐに黄色い髪をした身長の大きい２０ぐらいのレオーネと、黒髪ロングで年は彼と同じくらいのアカメ、片方が義手になっている、≪ナイトレイド≫ボスであるナジェンダの女性３人にダイアの話をした。
「風を操ったってことは帝具か……まさかな…」
ボスが言った。
それに反応したのはアカメとレオーネ
「どうしたんだ？」
「ボスが煮え切らないような態度を取るなんて珍しいじゃねーか」
「いや、ちょっとな。昔の上司に似たような帝具使いがいたんだよ」
そして話に置いてかれっぱなしのタツミはここでやっと話に入った。
「帝具って何だ？」

……会話に割り込むにしては間抜けな言葉だったようだが。
「それはみんなが集まった時にしてやる。とりあえずそのダイアとかいう男についてだ。タツミ、お前の主観でいいから思ったことを話してくれ」
話をはぐらかされてしまったが、ボスへの報告はちゃんとしなければいけないと解っていたため切り替えて話を始める。
「はい、まず強いですね。はっきり言って目で追うことすらできなかったです」
タツミはダイアについて思うところを語りつづけた。
「ですが、俺たちの敵にも、そして味方にもなることは考えられないと思います」
「どうしてだ?」
ナジェンダが口をはさむ。
「なんていうか、帝国を恨んでいるのは間違いありません。しかしなんとなくですが俺たちとは合わないような気がします」
そんなあやふやな言葉に見ていたレオーネが食ってかかった。
「おいおい、たつみ〜。そんな自分の感覚で話すなよー」
「あねさん、ボスは俺の主観で話していいって言ってましたよ!」
話を聞いていなかったレオーネは怒られると思いながらナジェンダの様子をうかがい見る

「……」

運のいい事にナジェンダは何かを考えているようだ。

アカメも何かを考えt……夕食のことだろう。

その証拠によだれが出ていた。

「よし、そいつに関しては特に気にしなくていい、敵にならないなら気にする必要もないしな。だが、たまたま見つけたなら今度ここに連れてくるように、ちょっと話がしてみたい」

ナジェンダは考えた結果、このような結論を出した。

「りょーかい！っというわけでタツミ！なんだかんだで初陣お疲れ様だな。多少気にしなければいけないところもあったけど、それをばねにがんばりなよ！おねーさんは期待してるよ」

「……はい！」

タツミはレオーネが気を使ってくれたことに気付いて、気合を入れて返事を返したのだった。

とある帝都の裏路地
「はっくしょん!!」
今日は冷えるな。
そんなことを考えながら町を歩く青年の姿がそこにはあった。

# 狂賊を狩る！

オーガが何者かに殺されてから2週間が経ったある日の夕方。
帝都のメインストリートはいつもと違うにぎわいを見せている。
近年、帝都にすむ人間を恐怖によって震えあがらせてきたナイトレイド。
彼らの殺しと一風変わった殺しが、近頃帝都で多発しているのだ。
まず標的がずいぶんと違った。
ナイトレイドは今まで富裕層などを中心に、政府要人、軍関係者、連続殺人犯など様々な者を標的としていたが今回の殺しは政府の要人だけが何人も同じ方法で殺害されていた。
それは放火だ。
夜に急に火の手が上がり、たまたまそこに乾いた風が吹く。
そうすると、一気に屋敷は炎上して全てを焼きつくすまで消えることはない。
そしてそれはたちの悪い事に窓やドアと言った全ての出口から一斉に火の手が上がるのだ逃げれるはずがない。

これだけ何件も事件が起こっているのに犯人の検討すらついていない。
犯人を見たという証人が何人か出てきたが、全員要領を得ない証言ばかりだった。
なんでも身体全体がぼやけていてあまり見えなかったとか……まるで全身が透明な何かによって覆われてしまっているかのような。
もうすぐ日が沈む。
今日も放火が起こるんじゃないかと、気になった市民たちは空を見上げながら炎の明かりが出ていないか、注意深く探していた。

「俺は死ぬわけにはいかないんだ……」

ダイアは帝都中を隠密行動で走り回っていた。
目的は自らの義姉の仇を探すことだ。
何があっても生き残りなさい。
彼が最も大事にしている約束（信念）。
この約束を守るために、彼はこの２週間ひたすら種をまいていたのだ。

オーガの死によって危機を感じた帝都警備隊は常に４人１組（フォーマンセル）を組むようにしていた。
普通だったらダイアはそんなことも気にせずにターゲットを殺しに行くだろう。
しかしセリユー（義姉の仇）は帝具持ちなのだ。
そうなってくると、いくら強力な帝具を持っているダイアでも生き残れる保証はない。
だからこそダイアは帝都中で事件を起こしまくったのだ。
どこで事件が起こるかわからない状況では効率を重視して手分けをするのが当たりまえだ。
ターゲットが政府の重要人物ならなおさらのことだった。
「ドコダ、どこにいる……」

彼は暗闇の中、標的を探してひたすらに走り続ける……
過去に一区切りをつけるために……

「なんか今日は騒がしいわね……」
脇に大きな銃を抱えた少女……ナイトレイド所属のマインは日のすっかり落ちた帝都を疾走しながら言った。
「まぁ、その分関心が別のことに行っていて仕事はしやすいんじゃないですか？」
答えたのは、背中にこれまた大きなはさみ（ワンポイントでくまさんマークあり）を背負った女性……同じくナイトレイド所属のシェーレだ。
「……それもそうね、何はどうあれ後は帰るだけ、簡単じゃない。とりあえずシャワー

を浴びたいわね」
「背中流しますね」
気の強いマインにおっとりとしたシェーレ。
彼女たちはナイトレイドの中で最も仲の良いコンビなのだ。
また、遠くから標的を狙うことができる遠距離武器は近距離戦でそれを護衛する役目が必要になってくる。
そのため一緒に任務を行うことが多く、今回もその任務の帰りなのだろう。
そんな、仲睦ましい会話が繰り広げられているときに一人の少女がその様子を目に捉えることとなる。
正義を盲信し、正義を猛進し、そして正義であろうとする少女が……

「……見つけた、ナイトレイド」

「!?」
シェーレとマインが左右に分かれて飛んだ。
そこにはとある青年の探している少女がゆがんだ顔で地面に向けて蹴りを放ったところだった。
身体を改造されているのか、その蹴りは軽々と地盤を砕いた。
「顔が手配書と一致……ナイトレイドシェーレと断定、所持している帝具から連れの女もナイトレイドと断定！」
手配書を見ながら彼女は口を開く。
そこには確かにシェーレの顔が描かれている。
「やっと……やっとめぐり合えたな、ナイトレイド」
彼女の顔は更に歪みを増す。
この隙にマインとシェーレは帝具の準備をし、いつでも戦えるように体勢を整えた。
「帝都警備隊、セリュー・ユビキタス！」
その少女はそう名乗り、身体に力を入れる。

「絶対正義の名のもとに、悪をここで断罪する！」
人差し指を2人に向けて宣言した。
「パパはお前たちの様な狂賊とたたかい殉職した」
思いっきり凄味の利いた声で発言をする。
「私の恩師を殺したのもお前たちだ……」
彼女が戦う理由と言うのはもしかしたらダイアに近いものがあるのかもしれない。
彼女が正義を盲信する理由……それはなんなのか。
「絶対許さない!!!」
もしかしたらそれは悪に対する絶対の復讐心なのかもしれない……。
そしてこの一連のやり取りがが戦闘開始の合図となったのだった。

# 因果を狩る！

「先手必勝！」

そう言ってまずはマインが己の帝具である浪漫砲台≪パンプキン≫の銃弾を発射させる。

この帝具は持ち主の精神エネルギーを撃ち出す銃だ。

それゆえに弾切れはなく、その威力は持ち主の精神状態によって大きく左右される。

そんな帝具による攻撃にもセリューは冷静だった。

何もせずに立っていただけだ……彼女は。

「キュア～～！」

そんなかわいらしい鳴き声（？）とともに生物型帝具魔獣変化≪ヘカトンケイル≫

……通称コロが前に出た。

二つが激突して周りの地面からは砂埃が舞う。

「やったか……？」

残念なことにそのセリフはやっていないフラグである。

急激に巨大化したコロが銃弾を全て受け止めていたのだ。
「！……マインやはりあれは帝具です」
マインの帝具、パンプキンが止められたことによってシェーレが気付いたことを口にする。
マインも同じ考えに達したのか、うなずいた。
「旋棍銃化（トンファガン）」
そう言って服の中からその名前の通りトンファーと銃が一体化したようなものを取りだしそのまま発砲。
しかし相手は修羅場を何度もくぐって来たナイトレイドの人間。
そんな相手に通用するわけもなく、弾は宙を通り抜けただけだった。
それを一発で理解したのかセリューは戦法を変える。
「コロ、≪捕食≫」
その言葉を聞いたコロは今までの可愛らしい様子を一変させて、狂暴なクマ、はたまたパンダのように見た目を変えて敵に突っ込んでいった。
だがそこにいるのは鋏……万物両断≪エクスタス≫……を構えたシェーレだ。
この帝具は名前の通りに全てを切り裂くことができる。
硬さ、耐久値、その物質の構造なんてものをすべて無効にしてただ切ったという現象

だけを残していく。
気付いた時にはシェーレはコロの後ろにいてコロの首辺りからは血の様なものが出ていた。
「すいません」
彼女は何に関して謝ったのだろうか。
謝る気などさらさらなく、なんとなく癖で謝っただけなのかもしれない。
そして彼女はそのままセリューの方へ歩き出す。
だが一瞬後には切り裂かれたはずのコロが立ちあがり、シェーレに襲いかかろうとしていた。
「シェーレ!!」
マインが急いでパンプキンを発射。
攻撃を何とか中断させる。
生物型帝具は身体のどこかに核を持っていてそれを破壊しない限り、何度でも甦る。
それをシェーレはうっかり忘れていたのだ。
……戦場でうっかり忘れるなど普通はありえないことなのだが。
「コロ、腕!」
セリューがその言葉を発するだけでコロの腕は人体の3人分ぐらいの太さに膨れ上

がり、そのまま2人に襲いかかった。
早過ぎる腕の動きに残像が発生して、腕が何本もあるかのような錯覚を生みだす。
「ちょ!?何よこれ。逃げ場ないじゃない！」
「マイン！私の後ろへ!!」
軽く混乱気味のマインにシェーレが声をかけて自らが前に出た。
ぶつかり合う、腕と鋏。
そこに散る無数の火花。
「く!?お、重い！」
エクスタスは全てのものを斬れるほどの切断力を持つと同時にかなりの硬度を誇る。
そのため、このようにして立ても用に使用することも可能なのだ。
ピィィィィィーーーーーー
急に甲高い音が響いた。
2人がコロに手間取っている間にセリューが仲間を呼ぶため笛を鳴らしたのだ。
絶対的なピンチ。
そんな状況にもかかわらず……いや、そんな状況だからこそマインは強気に笑った。
「嵐の様な攻撃に、援軍も呼ばれた。……まさにピンチ」
パンプキンは使用者の精神に威力が強く影響する。

「だからこそ、いっけぇぇぇぇーーーーーーー」
そう、この帝具はピンチになればなるほど威力を増す仕様なのだ。
だが、核を砕けはしていないため、コロの身体はすぐに修復する。

ここで、少しできた時間を利用し、全員が体勢を立て直して、戦いは振り出しへと戻された。

帝具同士の戦いはここからが本番になる。

帝都警備隊が駆け付けるまで推測時間、あと15分

そうしてすぐに、場面は動くことになった。
「鋏（エクスタス）！」
そう言ってシェーレがエクスタスを前に掲げると、そこに強い光が生まれた。
奥の手だ。
帝具の多くは使用された素材によってこのような奥の手を持っている。
セリューは思いっきりこの光を目視してしまい、目がくらんでしまう。
ちなみにマインはコロの方を相手取っていた。
1対1にして使用者から先に殺してしまおうといった作戦のようだ。
「終わりです」
シェーレがそのまま飛び込んでエクスタスを振るう。
視界がはっきりないまま何度かの応戦があったが、結局セリューは地面に足を取られ決定的な隙を作った。

「しまっ!?」
必死になって手をクロスさせて攻撃に備えた。
スパッ!
その音によって両腕の肘から先が宙を舞う。
身体が真っ二つにされるような大きな隙を両腕を犠牲にして見事に防いだのだ。
「正義は……絶対勝つ!!!」
ゆがんだ笑顔のしたで、彼女の腕からは銃が生えていた。
人体改造だ。
「私が隊長から授かった切り札だ!食らえ!!!」
そう彼女は叫び、発砲。
大きな音が響いた。
金属同士がこすれ合うような
「馬鹿な!?」
「すいません」
防いだのだ。
至近距離からの射撃を…
このままでは死んでしまう。

そう感じたセリューはある決断をした。
「コロ≪狂化≫!!」
ヘカトンケイルの奥の手≪狂化≫
莫大な内部エネルギーを使用して、全能力の強化をするものだ。
それは帝具自体にも負担がかかるため使用が数カ月は使い物にならなくなってしまう。
「ギョアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア――――――」
身体の大きさも一回り大きくなったコロは大きく咆哮を上げる。
それは思わず、マインとシェーレが耳を覆ってしまうほどの大きさだった。
そしてそれが大きな隙を作ってしまったのだ。
「マイン!?」
コロの手の中で握られてしまったマイン。
「握りつぶせぇぇぇ!」
セリューが言うと、ミシミシという音を立てて手に圧力が加わっていく。
「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
思わず声を上げるマイン。
だがそれも一瞬のこと、すぐにシェーレが駆けつけて腕を切り裂いた。

「シェーレ！」
「間に合いました」
嬉しそうにシェーレを見上げるマインとそれにこたえるシェーレ。
だがそんな時だった。
シェーレの服が赤く染まったのは……。
大きく目を開くマイン
何が起こったのかわからないといった様子だ。
周りに目を向けると口から銃口をのぞかせているセリューの姿とこちら側に駆けているコロの姿が目に入った。
口の中まで改造が施されていたとは流石に考えなかっただろうシェーレは、それでも冷静に判断を下し、コロから距離を取ろうとする。
その時だったのだ。
彼女が異変に気付いたのは。
「身体が、動……か……」
セリューが彼女に打ち込んだのはきっと麻痺毒か何かが塗られていたのだろう。
彼女の脳から発せられる命令に身体は動こうとしなかった。
その一瞬後、コロは大きく口を開く。

無数の刃が覆い尽くされた、２年前一人の女性を死へと追いやった、その口を……。
『正・義・執・行・!!!!!』
セリューのゆがんだ顔にはっきりと書いてある。
これから自分がどうなってしまうのか、最悪の想定がシェーレには容易にできたのだが、それに対処をすることは彼女にはできなかった。

ドガァァァァン
そんな音が夜の帝都に響き渡る。

「おいおい、せっかく見つけたのに何なんだよ、この状況は……？」
それはコロがシェーレを食い殺した音ではない。
「2年間待ったぞ……」
一人の少年が帝具も発動させずに、狂化したコロを蹴り飛ばした音だった。
「セリュー・ユビキタス！もういい加減に殺してやる!!!」
右手の腕輪（ガントレット）を握り、青年……ダイアは悪（正義）に向けて指を突きつけていった。
帝都警備隊が駆け付けるまでの推測時間、あと5分

# 狂気を狩る！

「なんかよくわからないけど、加勢するわ！」
マインがセリューに銃口を向けながらダイアに言った。
「余計なことをするな！邪魔するならお前から殺すぞ……」
義姉の仇は絶対自分で取る。
そう心に決めているダイアにはこの提案は邪魔なものでしかなかった。
なんかこんなやり取りを前にもした気がしたのだが今のダイアにはさして問題ではない。
「マイン……私はまだ…体が…動かないので」
このままでは戦闘に発展しかけないのでシェーレが仲介に入る。
もしかしたら助けてもらった恩義を感じているのかもしれない。
……実際のところ、コロを見つけた瞬間にダイアがカッとなって蹴り飛ばしただけなので、彼に彼女を助けようという意図はなかった、それどころか彼女が襲われていたということに気付いていたのかさえ怪しいところだ。

「……解ったわ。この女はあんたに任せてあげる。だからさっさと殺しちゃいなさい」

シェーレの言葉にマインが同意し、銃口を下してシェーレのもとに移動した。

決してダイアの眼光にビビったわけではない。

「はいはい、言われないでもそのつもりだよ!!≪エアリアル≫!!!」

邪魔がされないことに安心したのか、相手の方に向き直り能力解放。

ダイアの身体が風を纏う。

「ん？その帝具見たことがあるぞ……お前は2年前の村の悪か！」

その動作と右手にあるものでセリューは彼があの時の少年だということを思い出したらしい。

2年前。

今ではその言葉を聞くだけでダイアは少しイラついてくるほどに嫌いな単語だ。

「……ああ、そうだよ。お前も殺して俺は2人のかたき討ちをとりあえず一段落させる」

忌々しげに小さく……しかし何よりも力ずよく吐き捨てた。

「も……？お前が隊長を殺したのか。……絶対に断罪してやる！」

恩師を殺した人間が目の前に現れたのだ。

それはセリューも怒りはする。
しかしそれはダイアも同じ……いや、それ以上だった。
「黙れ！お前が殺した姉さんの仇、取らせてもらうぞ、セリュー・ユビキタス!!」
「コロ、≪捕食≫！」
命令されたとおりにコロはダイアに向かって跳躍をした。
それをダイアは真正面から殴りつける。
手はそのままコロの口の中に吸い込まれ、その一瞬後にコロを吹き飛ばした。
そのままコロを追いかけて腰の剣を取りだして斬りかかる。
だがしかし、コロもやられてばかりではない。
狂化されたため身体能力の全てが向上しているので格闘術の様な動きで正拳突きを繰り出すした。
そうして剣と拳は互いにぶつかり合って双方を大きく吹き飛ばす。
その間セリューは何度か銃弾を撃ちだしてはいるが、風の膜に阻まれてダイアには全くと言っていいほど届いていなかった。
「ああ、もうっ、痛ぇな!?なんか強くねーか、あの帝具……」
ダイアの右手には一筋の血が流れていた。
すぐにそこには一層濃い風の膜が形成されて止血が始まる。

コロの刃が風の膜を上回ったという証拠だった。
そのことが彼には信じられなかったのだろう。
「気を付けてください。彼女は奥の手を使用しています！」
そんな声が後ろから聞こえてくる。
シェーレが少し戸惑っているようすのダイアに声をかけたのだ。
「なるほど……確か≪ヘカトンケイル≫の奥の手は狂化だったな」
それならば今の強さにも納得ができる。
そう思ったのかダイアは再び左手を右手の腕輪（ガントレット）に添えた。
「だったら俺も本気でやる。≪奥の疾風（じ）「いたぞ!!ここだ」って何だよ！おい。このタイミングで来んな!!」
ダイアが奥の手を使用しようとした瞬間に、警備隊が押し寄せてきた。
ダイアとしてはこのままセリューを殺してしまいたい。
だが、そんなことをすれば死んでしまうリスクが高くなる。
それは絶対にだめだった。
「ほんと邪魔だな！てめえらから殺すか……」
にらみを利かせて今来た警備隊の方を見た。
あまりの剣幕に少したじろぐ。

「そんなことやらせると思ってるのか!!コロ！」
だがやはり、彼女とコロがいる限りそれの実行も困難だ。
「……やっぱりこうなるんだな、仕方ねぇ。今日のところは帰るとするか……」
「逃がさんぞ、オーガ隊長の仇だ！」
「お前が仇とか何とか言ってんじゃねーよ!!≪全開放≫」
莫大な風がダイアを中心に巻き起こる。
≪全解放≫……文字通り纏っている風を周囲に放出する≪解放≫の上位版だ。
だがこの技には一つ弱点があって使用すると3分の間纏うことのできる風の量が激減してしまう。
……ちなみにこれは奥の手ではない。
「じゃあな、命日が伸びて幸運だったな、悪(正義)!!」
風の轟音で聞こえないと思ったが自己満足のつもりで彼はセリューに吐き捨てる。
「――――は――――!?――――ない――――絶――――悪――――は――――殺――――」
何かを叫んでいたようだが、それもやはり風に打ち消されて聞くことはできなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ、アンタ滅茶苦茶やるわね」
たまたま同じ方向に逃げたらしく、マインはダイアにそう言った。
「悪いな。俺は死ぬわけにはいかないんだ。どんなことをしてもな」
二人との約束だから……
そうは言わなかった。
マインはダイアがあまり言いたくないことだと瞬時に察したのか別の話題を切り出した。

こういうところは流石裏方稼業と言ったところか、鋭い。
「あんたの帝具。とんでもないわね……アカメの村雨レベルで強いんじゃない？」
「そうですね、直接戦わせて見ないと解らない部分もありますが……」
シェーレが話しに入ってきて、物騒なことを言い出す。
まだ体があまり動かないのかここまでの道はマインが肩を貸していた。
「俺はその村雨って帝具のことよく知らないんだけど……」
若干顔をひきつらせながら話に入れない居たたまれなさを彼女たちにアピールする。
「まぁいいわ、私はマイン、んでこっちがシェーレね」
その雰囲気を察してか、それともたまたまか、彼女は急に自己紹介を始める。
いや、この流れで自己紹介と言うのも些か変であるのだが……
「ああ、俺はダイアだ」
名前を聞いた瞬間、シェーレとマインはやはりといった納得顔を作る。
「そうですか。やっぱりあなたがダイアさんなんですね」
「やっぱり？」
「はい、タツミと言う名前をご存知でしょうか？」
ダイアはオーガを殺った時にいたやつがそんな名前だったのを何とか思い出す。
「あいつか……。じゃあお前らがナイトレイドってやつだな」

二人ともうなずく。
だがしかし、そのうち一人はとても不機嫌そうだ。
「面倒くさいけど、ついてきなさい。ボスがあんたにあってみたいって言ってたわ」
本当にめんどくさそうに言う必要はないんじゃないか？
ダイアは心の中で思う。
もちろん口にして、口論のもとを作るような真似もしない。
「……ああ、解った。俺もお願いしたいことがあるしな」
「意外と素直なのね、アンタ」
だがダイアの考えはマインにとって少し気がかりなものになってしまったようだ。
「おいおい、さっき自己紹介はしたはずだぞ」
話を逸らそうと茶目っ気たっぷりにおどけてみる。
「……意外と性格悪いのね、ダイア」
「いえいえ、マインほどではないよ」
今度は本音が情景反射で出てしまったようだ。
「何だとぉ！」
「マイン、そろそろ帰らなければいけない時間ですよ」
見るに見かねたのかシェーレが制止の声をかける。

「解ってるわよ！あとで覚えておきなさいよ」
「はいはい、覚えていたらな」
「だから覚えてなさい!!」
最初は無駄な口論を起こさないために考えていたのにどうしてこうなったのだろうか？
ダイアの疑問は尽きなかった。